素直じゃないほど鳴かせたい

素直じゃないほど鳴かせたい

Inazuma Eleven
Unofficial
Fanbook

Fudo Akio
×
Kazemaru Ichirota

R18
FOR ADULT ONLY

■成分表■

・いちゃらぶえっち
・風丸さんが乳首開発済み
・時間無さすぎて背景白い

■入りきらなかった設定■

・ギャラクシー前くらいの時間軸
・不動が風丸の家に転がり込んでる
・遠距離恋愛を経て、大人になってから付き合った

あれ……

不動ー、ちょっと買い物行ってきてくれないか

えー

だら〜っ

……

居候の身なんだから少しは役に立て！

ポイッ

←エコバッグ

お酒は20歳から

おっ、これも買っちゃお

えーと牛乳、にんじん、…ゲッ、トマトもかよ

こきつかいやがって…

ただいまー

おかえり

ひょこ

…って、え!?

ど、どーしたの風丸クン!?

ん

…はぁ～!?

ただの玉ねぎかよ！心配してソンした

なんだ、心配してくれたのか？

そりゃー心配するでしょ好きなヤツが泣いてたら

ふーん……

きゅん…♡

てゆーか腹減ったし続き作ろうぜ

晩ごはん何？

ドサッ

ハンバーグだ

えっ、ヤッター

とん

キュン

子供舌

うるせー

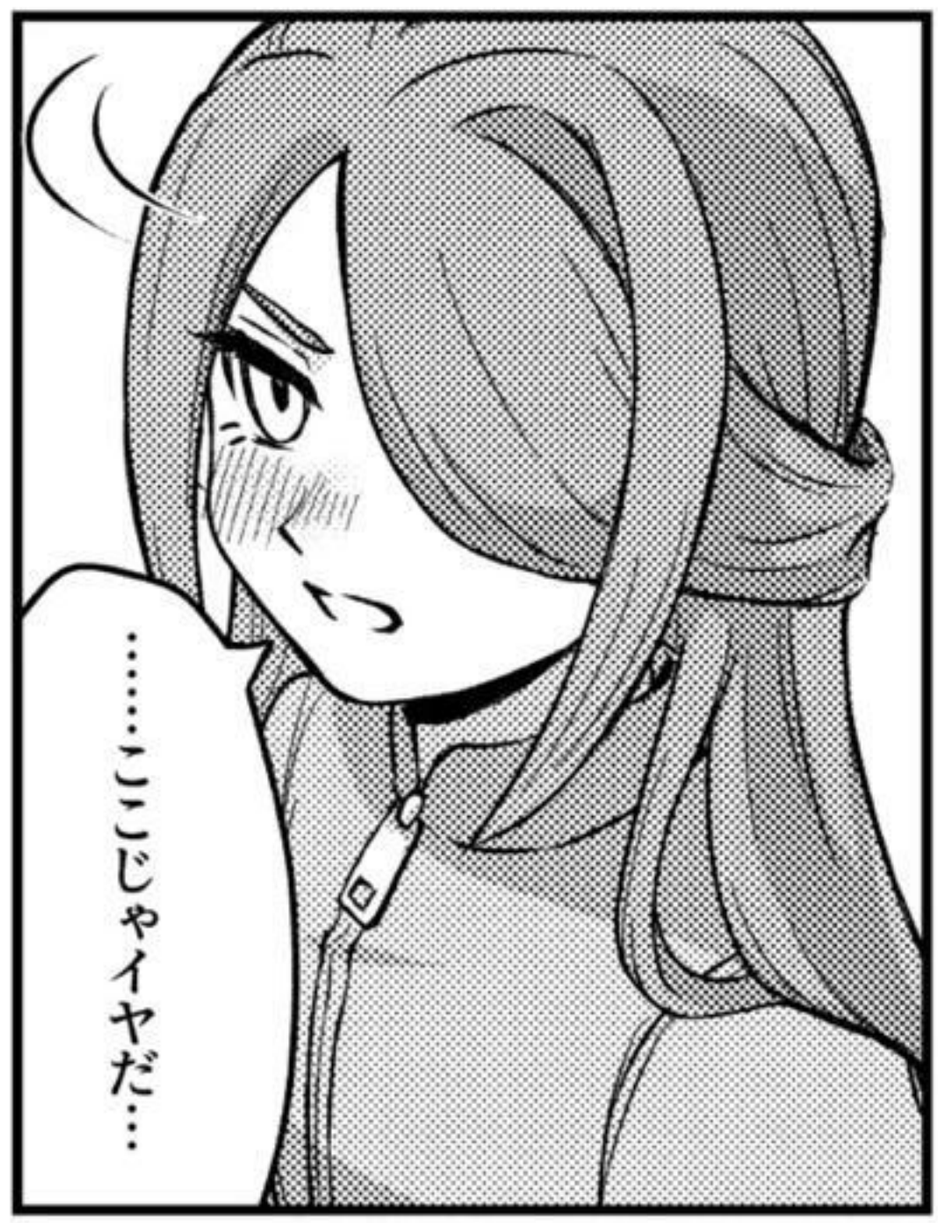
カラッ
あー、食った食った

明日オフだからって飲みすぎたかな……
いーじゃん、朝ゆっくりしてても
カラン
…まぁ、そうだけどさ

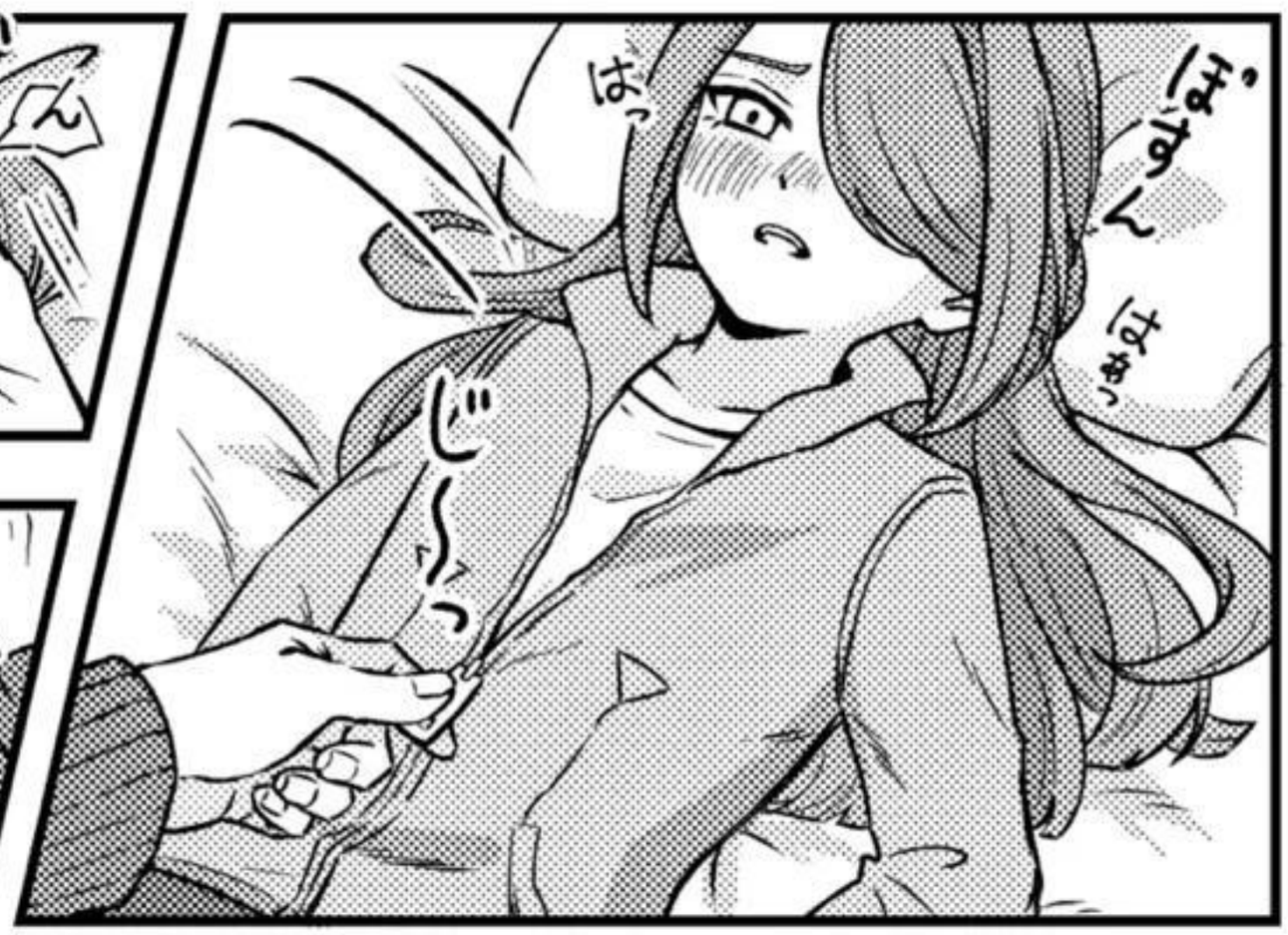
ガタッ
皿を…

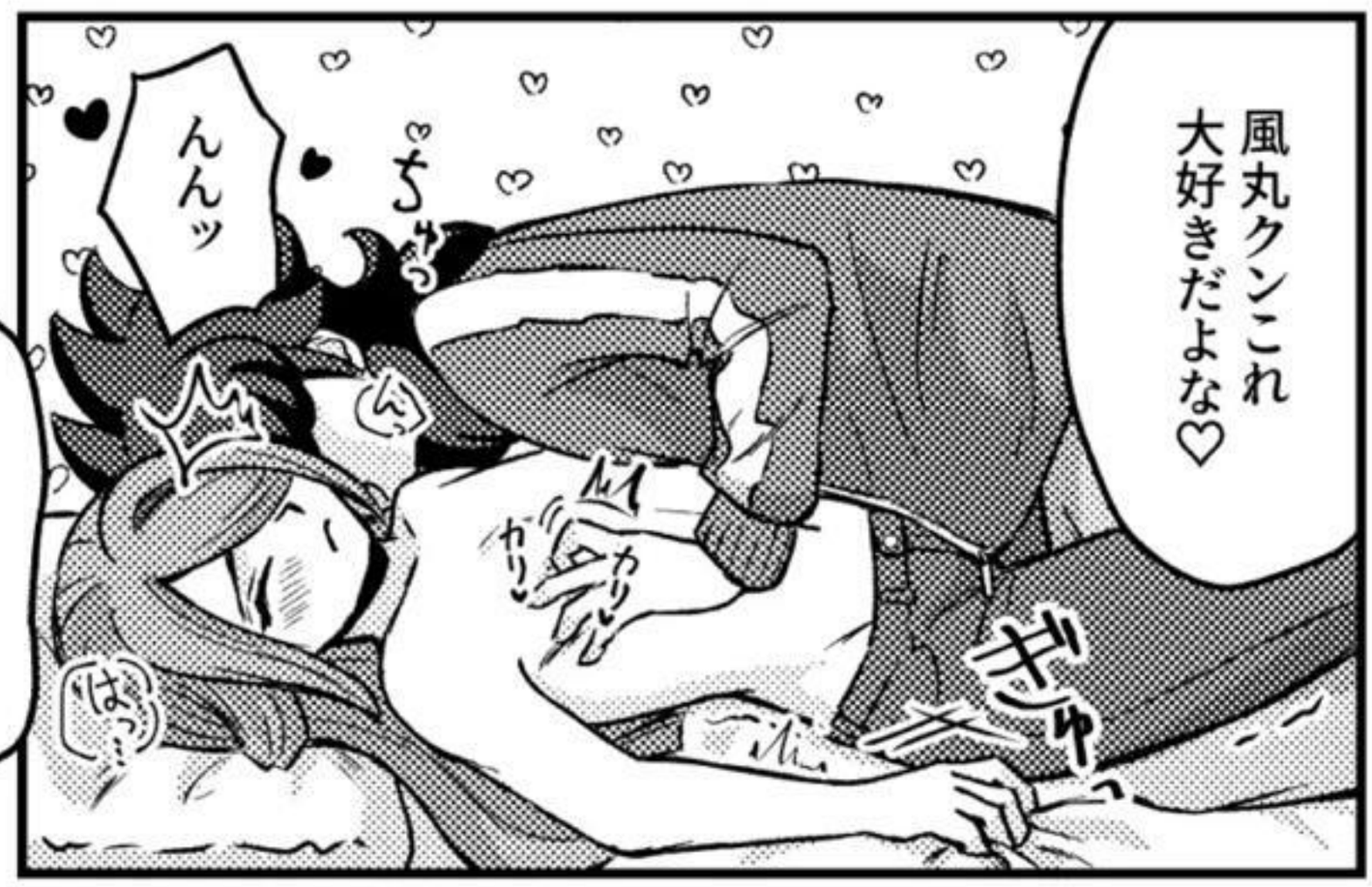
ねぇ、そんなの後でいいじゃん
すり
でも…

んっ
ぴくっ
風丸クン



ギシ…
ちゅ♡
ちゅ♡…
はっ
ふっ
はぁ
ちゅ♡
ちゅ♡
ちゅ♡
はぁ
すり♡
すり…
ふっ
ふっ
ふっ
ふっ…





はっ
はっ
ビク
んっ…
——ッ…
ビク
あ
は
きゅ
ちろ
ちろ
あら
ぴん♡
ぱくぱ
ん
アッ♡
ぷっ
ぷっ♡
たら…
ヒン♡
ふど…っ
ふ、
う…
へ
にゃっ
はっ
はぁ…
ビクッ

乳首だけでガチガチじゃん

ちゅ♡

くらっ…

あっ

う…、はぁっ…

ぐわっ

あっ、なんで…っ

ふる…っ♡

ぬにゅ♡

にゅる♡

ぬちゅ♡

アッはっ

する…

あっ♡

うぁっ♡

ぬちゅ♡

ヒク

ヒク

すぢゅ♡

…？

……柔らかい
けど準備した？

!!

カアアア

……

……ご飯作る
前に……

ずりっ

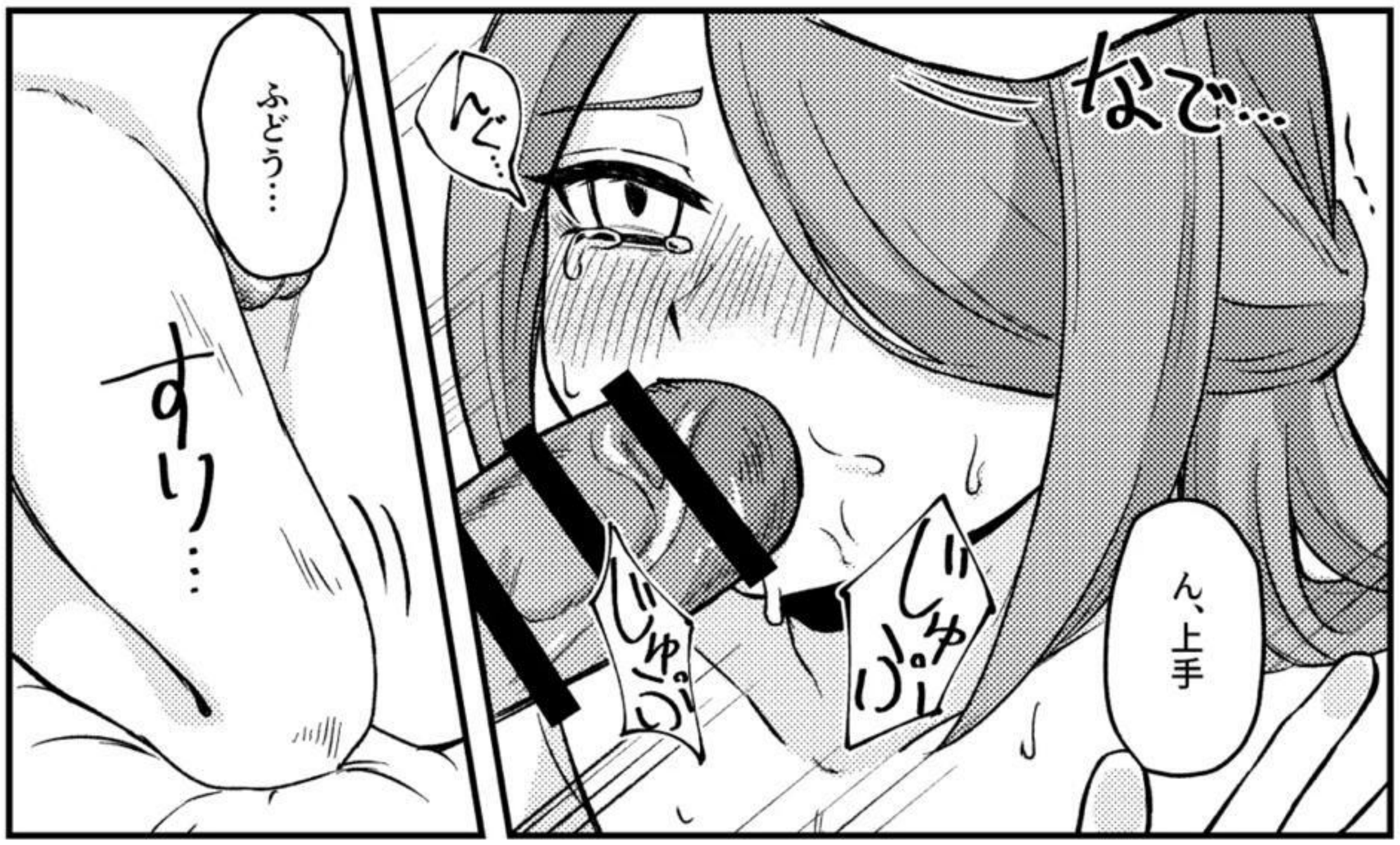
……っは、
風丸クンえろすぎ

おねがい、
舐めて？

ぶるんっ♥

はぁっ…♥

はーっ
はーっ
すん…♡
ビキビキ
はぁ…っ
不動のにおい……
ちゅ



ぬぷぷ…♡
っ…あ
ずちゅ
ぐぐ…
ぬぷ…
はっ…
う
ぐりっ
ぐりっ
ゆっ
ゆっ
…う、
は、あ……っ！
あ
んっ
ぱちゅ
ぱんっ
ぷるん♡
あ…っ
んっ♡
ぬぢ
ずちゅ
は
う
んーっ
んぅーっ
ぶん
ぶん
気持ちいいのバレちゃう…っ♡

ぢゅ
ぢゅっ
ぢゅっ
あ
うっ、
あぁ、あ〜〜っっ

風丸クン
かぷっ
ビク
ひんっっ

ガク
ガ
ガ
バタッ

はっ、
は——っ
とろ……
不動…
好きぃ……
はっ
はー——っ

はっ
はっ
やっと素直になったじゃん
ふどう〜…

ちゅー、ちゅーしたい…

あ、でもさっき舐めたから汚い……

お互い様だろ

ぽろぽろ

ちゅ♥

んぅ…っ

はぁっ、ふどう、すきっ♥

ずちゅ

ずちゅ

もっと♥ もっとほしい…っ♥

風丸クン…っ♥

かわいい、好きイきそう…っ

(は)

はーっ

はーっ

オレもぉ…っ

イく…っ

ピンッ

(あっ)

イっちゃうッ

ぐりっ

(ひんっ)

ぼ

ビク

ビク

どちゅー♥

イ…っ

エピローグ

寄稿：まむも

ボスンッとベッドに大の字になって天井を見つめてから体感五分くらい時間が経った。生憎この部屋には時計なんて置いてないし、律儀に終わってから何分経ったかを数えてる奴などこの空間には1人もいないけど。

目線をそのまま左下へ持っていく。酒のお陰かいつもより随分と素直だった風丸の綺麗なつむじがよく見えて、無防備な猫みたいだな、なんて思った。

重力に従って落ちる髪の間から真っ赤な耳がちらちらとこちらを覗いていて色のコントラストに目がチカチカする。一応暖房は付けたけど素っ裸のままじゃ折角のデートの予定がもう一日ベッドの上で過ごす事になってしまうので、体を起こして一度咳払いをしてから声を掛けた。

「あー…風呂入れる？　風丸クン。」

「むり。だるい。」

スッカスカの声にそう即答される。

そこら辺に脱ぎ捨てたパンツだけかっさらって、しゃーねェなぁと動きそうのない風丸の腕をぐいっと引っ張ってやるとへにゃりと崩した笑顔を向けながら大人しく体を預けてきた。まだ湿り気のある肌同士が触れたところがじわりと熱を持つ。

「ほら、明日一緒におでかけするんだろ？　がんばれって。髪はオレが洗ってやるから。」

「ん〜」

どうやらまだ酒が入ってる甘えたモードみたいで左肩にぐりぐりと頭を押し付けてきた。その姿が子供みたいで乱れた髪を手櫛しながら優しく頭を撫でる。

「ん。なに、どうしたの？　…喉枯れてたし水持ってくる？」

「いや…そういうのじゃなくって…」

愛おしくて自分でもちょっと引くくらいの甘い声で問い掛けてやると風丸が子供じみた甘え方をやめてボソボソと言い淀み、目線を投げかけてきた。情事の後でまだうるうると波打つ涙目が零れ落ちそうで指先で掬ってやろうとするも、風丸が腕で体全体を取り囲むように密着させてきたのでその動きを止めて、背中に手を回してやった。酒のせいで普段オレよりも高い体温が更に熱くなって、逃がさないように背中に両手でギュッと封までされたら、リボンでぎゅうぎゅうに縛られたプレゼントになった気分だ。

左肩に小さく熱いため息がかかって、呼吸音と互いの心拍音で消え入りそうな、でもはっきりと意思を持った声が耳を擽る。

「すきだよ、不動。」

「…ふーん？」

特大級の愛の言葉を受けて、心の底から満たされてく感覚に酔いしれながら、風丸の後頭部をそっと両手で持ち上

げて目線を合わせた。多分今オレは限りなくだらしない顔をしているのだろう。
ジト目で見つめ返してくる風丸に笑いかけながらさっきのお返しと言わんばかりに力強く抱きしめて愛らしい丸い頭にわざとらしく音を立ててキスをした。
「すきだよ、風丸クン。」
「…恥ずかしいヤツ。」
さっきと打って変わってしおらしくなった風丸の目をもう一度覗き込んだ。視線が交わる。
「イーブンだろ。寧ろ風丸クンの方が恥ずかしいヤツじゃない？」
「…なんで。」
「最中の風丸クンの方が何度も何度も恥ずかしい声出してるし。それに、」
「もったいぶらずにはやく言え。」
「…シラフの風丸クンから素直な言葉が出るほどに興奮してたんだろ？　もう酔い覚めてるコト位分かってるけど。」
首元のキスマークをなぞりながらそう答えるとまた絡まっていた目線が泳いで逃げてしまう。丸い蓋付きの海へ隠れたと思ったら下半分だけ開いてまたこちらを見やった。
「…いつも愛情表現が不動よりも少ないのは悪いと思っている。「そんなコトな」いいから。」
おもむろに温かいものが口内に割り入ってきて、いつもは逃げ腰の短い舌がザリッ、と上顎をなぞってくる。伏せられたまつ毛と互いの体温が交じるのを感じていると風丸に舌先をじゅっ、と吸われて「ん…」と声を出してしまった。
「んふふ、」
風丸は恥ずかしそうにしながらも満足したのか銀の橋を繋ぎながら薄い唇を離す。
は、と吐かれた息がやけに煽情的で、先程起こしたのにも関わらずもう一度押し倒す羽目になった。
扇状に広がった髪が下腹をズクンと重くさせる。
「いいの？」
「…汲み取れない程馬鹿じゃないだろお前。」
ギシッと鳴るベッドがオレにも風丸にも素直になれよと言っている様な気がする。
「風丸クンって意外とむっつりだよな。」
「言ってろ。」
「おかわりちょうだい？」
「ばーか。」
オレだけに見せてくれる素直じゃない面も大好きなんだけどな。
なんて野暮な言葉はベッドシーツに沈み込ませて、上気した表情を更に惚気させる為に、まだてらてらと濡れる唇に何度目かのキスをした。